

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 3 年目)

1. 研究課題

人文学研究資料にとっての Web の可能性を再探する

RE-EXPLORATION OF POTENTIALS OF WEB FOR RESOURCES OF THE HUMANITIES

2. 研究代表者氏名

永崎研宣

Kiyonori Nagasaki

3. 研究期間

2013 年 04 月 - 2016 年 03 月 (3 年度目)

4. 研究目的

Web 技術の発展にともない、人文学資料向けの Web サービス（以下、人文系 Web サービス）においてもサービス同士の相互連携をはじめとする様々な面での新しい可能性が大きく拓けてきているが、古い設計に基づくシステムやデータの改良は容易ではなく、結果として、最先端の Web 技術が投入されたものとそうでないものが入り乱れた状態になっており、利用者にとっての利便性という観点からは改善の余地がますます大きくなってきている。本研究の目的は、人文科学研究所における各種 Web サービスを中心としつつ、本研究の共同班班員が関わっている様々な Web サービスの事例も含め、現在の Web サービスとして求め得る水準と実際のその距離を再検討することで、それを縮めるための方策を明らかにすることにある。この再検討にあたっては、各種人文系 Web サービスの研究における意義だけでなく、当初計画や依拠する規格、予算の性格、低コストな改良可能性など、学会研究会で報告されにくい部分にも焦点をあてていくことで、問題の具体的な解決策に少しでも近づけることを目指す。

As development of Web technology, Web service for resources of the humanities has been increased its possibilities regarding interoperability of various services and so on. However, it is still difficult to solve several problems such as improvement of legacy systems and data. As a result, it has become difficult for humanities scholars to use them easily among the mixed environment of legacy and advanced services. Under such circumstances, we aim to re-explore Web for resources of the humanities based on surveying ideal implementations and current various Web services which have been

managed mainly by ourselves in order to clarify ways of realizing better Web services for resources of the humanities.

5. 本年度の研究実施状況

2015年度は、8回の研究会を開催するとともに、本研究所にて主催した JADH2015 国際シンポジウムの開催に協力した。研究会では、これまでに引き続き、人文学における Web の活用に関わる技術面・運用面について、公開しにくい内容も前提とした上で議論を行ない、班員全体として、Web 活用に関わる知見を深めた。さらに成果公開に向けて、ガイドラインとしての書籍を刊行すべく出版社と交渉するとともに、原稿執筆に共同で取り組み、そのなかで班員同士での認識のすりあわせを行った。とりわけ、文字コードの記述に関する議論に時間をかけ、班全体としての認識を高めるとともに、想定読者、すなわち、本研究班が課題とするテーマに取り組む層の想定と、その層に対する記述の適切さといった観点からの検討を行った。

7. 本年度の研究実施内容

- 2015-05-15 海外の動向とミュージアム情報の Web 展開
 - ミュージアムでのドキュメンテーションに係るメタデータについて 発表者 北岡タマ子 お茶の水女子大学
 - 西洋史における Web の活用：2つの視点から 発表者 菊池信彦 国立国会図書館関西館
 - 人文系 Web の要件をいかにして広めるか 発表者 永崎研宣 人文情報学研究所
- 2015-06-12 Web 上の漢籍の可能性
 - 漢籍リポジトリとマンドク的设计背景 発表者 Christian Wittern 京都大学人文科学研究所
 - 人文系 Web の要件と可能性 発表者 永崎研宣 人文情報学研究所
- 2015-07-17 米国における人文学 Web 情報とデジタル・ヒューマニティーズ教育
 - 米国での英文学 DH 教育 発表者 横山説子 ミシガン大学大学院
 - 人文系 Web の要件と可能性 発表者 永崎研宣 人文情報学研究所
- 2015-08-21 コーパスと Web
 - 歴史コーパスについて 発表者 小木曾智信 国立国語研究所
 - 人文系 Web の要件について 発表者 永崎研宣 人文情報学研究所
- 2015-12-15 人文系オープンデータと Web
 - 国文研によるオープンデータの検討 発表者 永崎研宣 人文情報学研究所

- 発表者 松田訓典 国文学研究資料館
- Web 上で展開される人文学の現状 発表者 永崎研宣 人文情報学研究所
- 2016-01-20 構造化テキストの共同編集
 - 共同通信 NewsML の開発と XML 規格の展望 発表者 竹村貴弘 共同通信社
 - 人文学と Web に関する共同研究班の成果取りまとめ 発表者 永崎研宣
- 2016-02-24 人文学における文字コードと Web
 - 人文学における文字コードと Web 発表者 永崎研宣
 - 発表者
- 2016-03-24 人文学における文字コードと Web
 - 人文学における文字コードと Web 発表者 永崎研宣

8. 共同研究会に関連した公表実績

○JADH2015 (International Conference of Japanese Association for Digital Humanities) 1-9, September, 2015, Kyoto University.

○永崎研宣「SAT 大蔵経テキストデータベース 人文学におけるオープンデータの活用に向けて」『情報管理』Vol. 58 (2015) No. 6 pp. 422-437. doi:10.1241/johokanri.58.422.

○永崎研宣「「デジタル・アーカイブ」の利活用可能性を高めるために—仏典画像統合検索 API の構築を通じて」『情報処理学会研究報告.人文科学とコンピュータ研究会報告』, 2015-CH-107(3), pp. 1-4.

○永崎研宣「「翻デジ」と NDL」『情報処理学会研究報告.人文科学とコンピュータ研究会報告』 2015-CH-106(12), pp. 1-4.

○田中 僚,松村 敦,宇陀 則彦, 原資料の構造を反映したデジタルアーカイブの構築, 情報処理学会研究報告. 人文科学とコンピュータ研究会報告, 2015-CH-106(9), p.1-2, 2015-05-09.

○森嶋 厚行,川島 隆徳,原田 隆史,宇陀 則彦, クラウドソーシングってどうですか?Crowd4U×NDL データの事例, 情報処理学会研究報告. 人文科学とコンピュータ研究会報告 2015-CH-106(13), p.1-4, 2015-05-09.

○永崎研宣「「デジタル・アーカイブ」の利活用可能性を高めるために—仏典画像統合検索 API の構築を通じて」『情報処理学会研究報告.人文科学とコンピュータ研究会報告』, 2015-CH-107(3), pp. 1-4.

○Kiyonori Nagasaki, Paul Hackett, A. Charles Muller, Toru Tomabechi, Masahiro Shimoda, “Significance of Linking between past and present, east and west, and various databases”, Digital Humanities 2015, Sydney (Australia), (2015/7).

○Christian Wittern 「Multiple Views and Modes of Engagement with a Repository of Digital Texts」, Digital Humanities 2015, Jul 2015.

○Taizo YAMADA, Satoshi Inoue. Detection of People Relationship Using Topic Model from Diaries in Medieval Period of Japan, Proceedings of DH2015, -, 2015. (査読有)

○永崎研宣「研究活動としての人文学デジタル化 —仏教学知識基盤を事例として」, 大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」第1回 日本語の歴史的典籍国際研究集会プログラム「可能性としての日本古典籍」, 於国文学研究資料館 (2015年7月31日) .

○ Taizo YAMADA, Analysis of Archaeological Information Using Topic Model Technologies, International Workshop on Application of Science and Technology for Cultural Studies(IWASTCS2015), Venue: 6th Floor, Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre (SAC), Bangkok, Thailand, 13 Nov 2015.

○永崎研宣「SAT 大藏経データベースをめぐる漢字情報」, シンポジウム「字体と漢字情報」—HNG 公開10周年記念—, 於国立国語研究所, (2015年11月22日)

○Taizo YAMADA. Extraction and Management of Spatiotemporal Term from Field Notes and Data Structuring for its Sharing in Area Studies, Proceedings of PNC2015, -, 2015. (査読有)

○岩崎陽一「学術データベースの開発手順について」早稲田大学オペラ／音楽劇研究所研究会, 早稲田大学, 2015/11/28.

○山田太造「地域研究史資料を対象とした時空間的特徴の抽出と場面の構造化」, 第14回情報科学技術フォーラム講演論文集, vol.14, no.4, pp.409-410, 2015.

○山田太造「フィールドノートに記述された場面を特徴づける—語彙による知識処理—」, 特集第20回情報知識学フォーラム「地域情報学における知識情報基盤の構築と活用」, 情報知識学会誌, Vol.25, No.4, pp.315-324, 2015.

○永崎 研宣, 苜米地 等流, A.Charles Muller, 下田 正弘「持続可能なデジタルアーカイブに向けて—SAT 大藏経データベースにおける取り組みを通じて」『じんもんこん 2015 論文集』(2015年12月), pp. 219-224.

○ Kiyonori Nagasaki, “The SAT database and the future of digital humanities.”, WORKSHOP: Nirvana Sutra Workshop, UC Berkeley, (7-8, Jan. 7-8, 2016).

○山田太造「前近代日本史史料に関わる人名情報の収集・蓄積に関する考察」, 研究報告人文科学とコンピュータ (CH), Vol.2016-CH-109, No.2, pp.1-4, 2016.

○永崎研宣「テキストマイニングをめぐるデジタル・ヒューマニティーズの課題」, 第4回九州大学異分野融合テキストマイニング研究会シンポジウム — テキストマイニングとデジタル・ヒューマニティーズ, 於九州大学, (2016年1月30日) .

○永崎研宣「デジタルヒューマニティーズ：大藏経テキストデータベースプロジェクト」, 東京大学大学院情報学環 DNP 学術電子コンテンツ研究寄附講座 開設記念シンポジウム「これからの学術デジタル・アーカイブ」, 於東京大学福武ホール, (2016年2月9日) .

○山田太造「テキストデータを使うとどのようにフィールドが分類できるか?」, 日本人口

学会開催地域部会 2015 年度研究会, 2016 年 3 月 5 日, 総合地球環境学研究所.

○山田太造「じんもんこん 2015 開催報告 -議論沸騰の 3 日間 in 京都-」, 情報処理, Vol.57, No.4, pp.404-405, 2016.

○ウィッテルン・クリスティアン (編) : センター研究年報 2015 特集 漢籍リポジトリ、京都大学人文科学研究所所属東アジア人文情報学研究センター, 2016.

○ Kiyonori Nagasaki, “Re-Creation of Buddhist Studies in the Digital Era”, International Symposium: MEMORY, the (Re-)Creation of Past and Digital Humanities, Keio University, (15 Mar 2015).

○山田太造「東京大学史料編纂所の編纂とその業務にともなうデータベース」, 歴博公開シンポジウム「資料がつなぐ大学と博物館—「研究循環アクセスモデル」の構築にむけて—」予稿集, 2016.

○柳澤雅之, 高田百合奈, 山田太造「地域情報学の読み解き-発見のツールとしての時空間表示とテキスト分析」, 地域研究, Vol.16, No.2, pp.267-291, 2016. (査読有)

○Kiyonori Nagasaki, “Crisis of Humanities in Japan,” CEAL2016, Sheraton Seattle Hotel, (31 Mar 2016).

10. 共同利用・共同研究の参加状況

| 区分 | 機関数 | 参加人数 | | | | 延べ人数 | | | |
|---------------|-----|-----------|-----|------|-------|-------------|-----|------|-------|
| | | 総計 | 外国人 | 大学院生 | 若手研究者 | 総計 | 外国人 | 大学院生 | 若手研究者 |
| 所内 | 1 | 3 | 1 | | | 22 | 5 | | |
| 学内(法人内) | 1 | 13 (4) | | 1 | 5 | 40 (6) | | 4 | 7 |
| 国立大学 | 5 | 12 (3) | | 5 | 3 | 42 (6) | | 4 | 15 |
| 公立大学 | | | | | | | | | |
| 私立大学 | | | | | | | | | |
| 大学共同利用機関法人 | 5 | 5 | | | 3 | 13 | | | 11 |
| 独立行政法人等公的研究機関 | | | | | | | | | |
| 民間機関 | 1 | 2 | | | | 17 | | | |
| 外国機関 | 1 | 1 (1) | | | | 1 (1) | | | |
| その他 | | | | | | | | | |
| 計 | 14 | 36 (8) | 1 | 6 | 11 | 135 (13) | 5 | 8 | 33 |

※ () 内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

| | |
|----------------|-------|
| 総論文数 | 9 (0) |
| 国際学術誌に掲載された論文数 | 0 |

※ () 内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

13. 次年度の研究実施計画

本研究班は2015年度で3年間の期間を満了したが、班長の力不足により年度内の成果公開には至らなかったため、成果公開に向けて引き続き研究を遂行していく計画である。当初予定していたWeb上に公開するガイドライン及び書籍出版のいずれもまだ実施できていないため、両者について、速やかに実施すべく進めていきたい。そのために必要な、京都東京間の交通費をはじめとする予算措置については、他の研究機関等の別の研究計画との協働等といった形での予算確保を目指していきたい。現在のところ、本年度の国立情報学研究所の一般応募研究として採択された研究計画が、本研究と連携可能なテーマであることから、これを一つの財源とする可能性について検討している。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果公表計画および今後の展開等 本研究の成果は、一義的には、通常の学術研究と同様、学会等における研究発表や学術雑誌における論文公表等によって行われる。しかしながら、本研究の目標はそれにとどまらず、人文系研究の成果がWebで公開されるに際してのガイドラインを公表するところにある。このガイドラインは、より広く知られることを重視すべく、まず、これまでの研究会・シンポジウムにおける議論の成果を平易にまとめ、Webサイトにおいて適切な構造を以て公表する。さらに、それをよりわかりやすく解説する一般向けの啓蒙書を共同執筆し公開する予定である。この研究成果の公開後も、Webサイト上のガイドラインについては引き続き更新を続けていく予定である。